

## 超 音 波 検 診

### 動 向

検体検査（血液、尿など）に示されない段階で、各臓器（肝臓、膵臓、脾臓、腎臓、胆のう）の疾患を発見する可能性のある超音波検診は、生活習慣から蓄えられた病気が顕著に現れてくる四十代・五十代の受診者を中心に、多様な所見内容で多くの情報を得ることが出来る検査である。しかも本検診は、レントゲン検査のような放射線被曝の心配や検査に伴う苦痛もない。

産業保健分野における受診者数は、表1に示したとおりである。平成15年度においては、前年比673名増の7,620名となった。生活習慣病予防健診の付加項目として超音波検診が定着しつつあり、当協会に対する検査依頼も順調に推移し、3年連続しての受診増となった。団体数においてもその殆んどが毎年の依頼であり、増加傾向にある。

当協会では熟練した専門医の知識と経験をもとに、生活習慣病健診などとの併用受診はもとより、有所見者の精密検査の実施と、治療の出来る医療機関との連携によるフォローアップを行っている。

### 方 法

腹部超音波検査は可聴域外の音波（3～4 MHz）を対外より体内に発射しその反射を画像化することにより得られる情報で診断する装置である。この検査は腹部の実質臓器（肝臓、膵臓、脾臓、腎臓）、胆嚢、腹部大動脈、さらにはリンパ節、膀胱、前立腺、腸管等腹腔内の様々な臓器の状態を把握することが可能である。検診では実質臓器と胆嚢及び腹部大動脈を検査の対象としている。

#### A. 検査前の注意

- ①前夜9時以降の飲食をせずに午前中に検査する。
- ②午後に検査を行う場合には胆嚢が収縮していることを考慮して牛乳、卵、油ものを避けて通常の半量の朝食を摂ってもらい検査まで6時間の絶食とする。
- ③消化管のバリウム検査は数日前から実施しない。
- ④胃X線や内視鏡を同日に施行する場合には臓器の描出状態を考慮して超音波検査を先に行う。

当施設では検査に先立って下剤等の薬物投与ならびに浣腸等の前処置は行っていない。

#### B. 検査の実際

- ①受診者は背臥位で腹部を露出し、検査者は受診者の右側の装置に向かって座る。
- ②腹部全体にゲルを広く塗布し、探触子を受診者の皮膚に密着させ腹部の臓器を観察しながら記録する。

#### C. 判定

技師により画像をすばやく適切に判断すると同時にフィルムを撮影し専門医とディスカッションしながらダブルチェックで最終判定を下している。尚判定に際しては、前回受診歴を確認し前回所見並びに精検所見などを考慮して判定を下している。

#### 結果、考察

平成15年度は前年に比べ男女とも受診者数が増加した(表1)。依頼団体も増加した経年受診者が多く超音波検診が職域領域での検診として認知されてきたと思われる。

判定内容の内訳を見ると要医療となる要精密検査群、要受診群、主治医継続群は全体で8.7%であり、それ以外の何らかの所見を有する群は全体の72.3%と7割強をしめていた。

臓器所見内容(表3)をみると胆嚢ポリープ、脂肪肝、胆嚢包、大動脈石灰化といったいわゆる生活習慣病に関連する所見が多かった。このほか悪性腫瘍との鑑別が必要な胆嚢腺筋腫症、1cm以上の胆嚢ポリープ、肝血管腫を含む肝腫瘍、膵嚢包、膵管拡張、腎腫瘍といった所見の拾い上げ、さらには悪性腫瘍ではないものの、場合によっては治療が必要な胆石、胆泥、肝繊維症、膵石灰化、水腎症といった症例も昨年同様拾い上げた。

現在当施設では試行錯誤しながらこれらの①生活習慣病関連の画像診断②悪性腫瘍との鑑別を含む要精密検査群③悪性腫瘍以外の要精密検査群の3群を主体に④現時点では病的意義のない要観察群を含めて多岐に渡る多次元的所見に対しいくつかの視点から分類分析しup to dateな治療まで視野に入れて検診処理を行っている。

また事業所の希望によっては上記処理した判定結果のみならずエコーフィルム自体の貸し出しも行っており様々な事業所の事細かなリクエスト内容に対応も試みている。

腹部超音波検査は有用な検査ではあるが、その対象臓器の多さと所見の多彩さで産業保健分野においては‘的’が絞りにくく一元的な検診になじみにくいという側面を合わせ持っている。当施設ではこの点において試行錯誤しながら分類整理し、それぞれに現代の医療にマッチした適切な判定処理を試みている。今後もさらに可能な限り経時的側面も加味し、各事業所にマッチしたテーラーメイド的側面を有する検診を目指したい。

関係の集計表は73頁に掲載